

後輩には

三年 五十嵐 友則（昭和六一年度）

のこすはあと数か月。

三年前の春。この学校に入学した頃の自分は大人にでもなったような感じと、買ったばかりの学生服がともきゆうくつだなあと感じただけで、中学生ということについては、はつきりとわからなかった。

短い春があつというまに過ぎて夏が来た頃。学校の空気にもだんだん慣れてきて、三年生とも話せるようになり、遊びに行くようになった。しかし、夏を過ぎると今まであまり勉強もしなかった先輩が勉強をしているのにぶつかつた。その時自分は、「なぜ勉強なんかしているんだ。テスト前でもないのに。」と思つた。

だが、今自分があの時の先輩と同じ立場になつてみると、『高校受験』という大きなものが目の前に迫つてきていたからそうしたのだとわかつてきた。

卒業を前に先輩は、「一・二年のうちに少しでも勉強していれば、苦しまずに済んだはず。」と自分達後輩に心境を話してくれた。そしてその言葉は、以前に卒業していった先輩達の大部分の人も言っていたことだった。

送別会のその言葉が効いたのか、自分も、また何人かのクラスメイトも「二年になったら少しずつでも勉強しよう。」と思つたと思う。

やがて、寒かった冬が過ぎ、先輩達は卒業して行つて、当然のように自分達は二年生となつた。しかし、二年生になつても

勉強はできなかった。つまり、「今日はこのテレビを見てからにしよう。」とか「今日は眠いから、明日必ずすることに決めた。」とか思つて、結局できないまま一日一日と過ぎていったのだ。時々、ふと先輩が話してくれたことを思い出すこともあつた。「一・二年のうちに少しでも……。」

三年生になつた。いよいよ目前に『高校受験』が迫つてきている。最近、一人になると特に受験のことが気になつて苦しくなつてくる、と言うとオーバーかもしれないが、なんだかそんな気がする。もしかすると、「クラスの他のみんなは合格、自分だけが不合格になるんじゃないだろうか。」そんなことを思つたりする毎日だ。勉強にしても、前は、中間とか期末のテストといつても、与えられた範囲だけやっていればそれですんだが、受験に範囲はない。この前の期末テスト前は、受験の勉強とテスト勉強の両立で、大変つらかつた。

今になつてはじめて、あの言葉の意味がわかつたような気がする。先輩も自分と同じように、やろうと思つてもできない日々を繰り返していたのだろう。「自分は、この事に気づくのが遅かつた。でも、後輩のみんなには、自分の将来のことをじっくり考えて本当に今のままでいいのか。」と言つたのだろう。

受験まであと百日と少し。僕も先輩と同じように後輩のみんなには、「一・二年のうちに勉強しておけば、苦しまずにすむ。」と言いたい。決意がないと勉強はできないということも考えてみてほしい。

合格するにせよ不合格になるにせよ、入学試験がすめばこの学校を卒業することになる。なんだか寂しくなつてくる。

近ごろ、回りの景色をじつと見つめることが多くなつてきた。